

02 インタビュー

07 教えて！知るぼると
2024年からNISA制度は
どう変わる？

11 連載「楽しみながら備える 新・防災術」
第2回 いざというときに備える
最低限の道具類とは？

14 マンガ「わたしはダマサレナイ!!」
強引な勧誘や解約の妨害、
高額なキャンセル料など
中古自動車の売却トラブルが増加中

17 金融教育の現場レポート
～商業科と連携した
英語科による金融教育～
日本と諸外国の医療保険制度を
比較して社会の仕組みを学ぶ

22 おたよりコーナー
漢字矢印パズル

23 都道府県金融広報委員会一覧
編集後記

※取材は感染対策を徹底して実施しています

先生を驚かせた「すごい声」
勧められて始めた声楽が
人生の扉を開く鍵に

幼いころから歌が大好き。当時人気
だった芸能雑誌『月刊平凡』の付録の
歌本が毎号楽しみで、それを見てコー
ドを覚え、小学生のときにはもう、ピ
アノでヒット曲の弾き語りを披露して
いたという森公美子さん。その歌声の
非凡さに気づいたのは先生たちでした。
「私、いい大人と出会ったんだと思
いますね。ちょっと歌ったとき『すごい
声してるね』って言われたんです。す
ごい声っていうのがどういう声か、自
分にはわからなかったんですけど（笑）。
そのあと中学1年で出会った音楽の先
生が、私の歌声を聴くなり『あなた、
声楽やりなさい！』って。それまで声
楽が何かも知らなかったのに、面白そ
う！って思っちゃった」。

仙台市内の老舗旅館の「お嬢さん」
として生まれ、ピアノや油絵をはじめ、
1週間の予定がびつしり埋まるほど、
さまざまな習い事をしてきた森さん。
なかでも声楽は特別なものに。
「すごく柔軟な両親で、子どもの中に
いろんな可能性を見つけようとしてく
れたんですね。それは習い事に限らず、
いろんなものに触れて育ったのは大き
かった。父はアメリカのポップスが好
きだったので、私もちっちゃなころか
らダイアナ・ロスとかシュープリームス
とかを聴いていて、自然とそういう歌
が体の一部になっていたんですよ。だか
ら、本当はクラシックの声楽向きじゃ
なかったのかもしれないんだけど（笑）。
でもね、このクラシックがまさに「身
を助く」で。大学に入る前にどうして
もニューヨークに行きたくて、自分の
歌を吹き込んだテープをジュリアード
音楽院に送って、声楽科のサマースク

インタビュー

森 公美子 さん

歌手、タレント、女優

圧倒的な歌唱力とチャームなキャラクターで
日本のミュージカル界には欠かせない存在の森公美子さん。
テレビで明るい笑いをふりまき、オペラ歌手でもあり、ジャズも歌う。
肩書を絞るのが難しい、生粋のエンターテイナーです。
歌に導かれたこれまでの道と、暮らしのこと、そして今の願いなど
さまざまなエピソードを表情豊かに語ってくださいました。

1ルの入学審査を受けたら見事パス。
それが、音楽への道を歩き始める最初
の一步になりました」。

イタリアで大きな挫折を経験 ミュージカルとの出会いで復活

帰国後、昭和音楽短期大学に入学し、
卒業と同時に二期会オペラスタジオの
研修生になった森さんは、勉強のため
イタリアへ。しかしそこで味わったのは、
途方もない挫折感でした。勉強漬けの
日々に疲労困憊するなかで、気づいて
しまった圧倒的な経験の差。お母さん
のおなかの中にいたときからオペラを
聴いていたようなイタリア人との間の、
とうてい埋められるとは思えない隔た
りに、打ちのめされたといいます。

「目の前にあるのは分厚い壁どころの
騒ぎじゃない。壁の上に塔まで立って
いるような感じ。それを飛び越えるの
はまず無理で。地道に掘り進んでいく

しかないんだろうなと思ったとき、もうどうしたらいいかわからなくなってしまう。すでに努力も限界に思えて落ち込みました。でもこの挫折があったから、今の自分があるんだと思う。ここからなんですよね、私の逆転人生はー」。

どん底の気分のまま、ロンドンに住んでいた親戚の家を訪ねたときのこと。

叔母さまが気晴らしにと誘ってくれたミュージカル『マイ・フェア・レディ』を観て、演者たちの楽しげな表情に、森さんは度肝を抜かれます。それは、張り詰めた空気の中、緊張感の漂うオペラの舞台とはまったく違うものでした。

「こんなに笑顔で演じられるって、なんて私に向いてるんだろうと思った。

それと同時に、イタリアに来てから忘れていた笑顔を思い出したんです。父に『おまえは笑顔がいいんだからな。ちゃんと笑顔で暮らしてるのか?』って言われたことも重なって、ああ、そうか、笑顔で勝負だ! って。自分を見つけた気分でした。

それまでの私は気持ちに余裕が全然なくて、料理が得意なのにイタリア料

理も作らず、イタリアに染まろうともしていなかったのね。ロンドンから帰ってからは、スローな「イタリア時間」にイライラするのはやめて、笑顔で心を開いたら、やっと自分の中にイタリアが入ってきたんですよ。それまでの苦しい3カ月は何だったの? っていうくらい、イタリアが大好きになりました。イタリア語も、毎日バルでおじちゃ

ミュージカルがやりたいーと、心の中で

本気で望んだら、不思議と道が開けていった。

大切なのは「想い」の強さかもしれません

歌の力、音楽の力ってすごいんですよ。
みんなで笑顔になりたくて、
障がいを抱える人たちに
歌を教えるボランティアを始めました



んたちに教えてもらって、すっごく上達したんです」。

ミュージカルをやるんだ！と心の中で決めて帰国。すぐにオペラデビューを果たしますが、そのあと、何かに導かれるように、ミュージカル出演への道が開かれていきます。

「オペラスタジオの踊りの授業で私を見つけた人がいて、ここに行つてと言われるがままに訪ねた先が東宝でね。ちよつと歌つて踊つてみせたら、台本を渡されました。実は『ナイン』というミュージカルのオーディションだったんですよ。ミュージカルがやりたいなと思いつながらもどうすればいいのかわからずにいたら、向こうからやつてきた。やつぱり『想い』って一番大切なかもしれない。叶うんですよ。本当に真剣に望んだなら、人の想いは何よりも速く、めざすところに届くものだと思います」。

劇場が一つになる瞬間がある それがミュージカル最大の魅力

2014年、ミュージカル『天使にラブ・ソングを』シスター・アクト』の初演で、帝国劇場初主演をつかんだ森さん。以来上演を重ねるたびに多くの観客を魅了してきたこの作品の幕が、2023年11月、東急シアターオーブにて再び上がります。

「初演から数えて5回目の上演。ありがたいことです。でも、再演を繰り返すつてつらいことでもあって、正解が見つからないんですよ。毎回、見つからずに終わってる。今回は私に与えられた最後の機会だと思つて取り組んでいて、本当にパーフェクトなものを自分の中につくろうと頑張っています。体力面も上げていかないと！」。

このコロナ禍を経験し、舞台人として、あらためて強く思ったことがあるそうです。

「舞台つて、お客さまがつくるんですよ。お客さまがいて、ミュージカルならオーケストラがいて、演者がいて、それらが一つになる瞬間がある。リモートじゃだめなんです。お客さまが目の前にいるのといないのでは全然違う。やつぱり舞台の空気を、声を、直に届けたいし、心に残る何かを持ち帰つてほしい。そうじゃなきゃいけないだろうと、すっごく思っているんです」。

まだミュージカルを観たことがない、興味はあつてもチケットを買つて足を運ぶまでにはいたらない、そんな人たちを劇場に誘うなら？と聞いてみると、「とにかく本気で歌つてますから！ どうやったら面白いものを見せられるか、出演者はみんなそれだけを考へて、1カ月2カ月と真剣に練習して舞台に立つわけですよ。ミュージカルの魅力と

いったら、やっぱり一体感。ミュージカルは台詞^{せりふ}だけでストーリーも理解できるし、予習も要りません。それこそ『推し』の誰かを目当てに行くのもいいし、そこで推しをつくるのもいい。何か楽しんでいただければいいなって。私ね、舞台の上で本当に楽しんでるんですよ。歌っていて、お客様も口角が上がってくるのが見えると、うれしくなっちゃうんです」。

楽しいからごはんを作る 誰かのために自分のためにも

レシピ本も手がけるなど、芸能界きっての料理上手として知られる森さん。舞台を離れたその暮らしぶりも気になるところ。例えば仕事と家事は、どのように両立させているのでしょうか。

「仕事と家事っていうんじゃないくて、どちらも『私のしたいこと』なんです。そりゃあ、したくない家事もありますよ。掃除とか片づけはだめで、そこはバイトにお願いしたりとか。でもキッチンに関しましては、自分でやりたいんです。例えば夜中の2時に帰ってきて、豚肉が明日までもちそうになかったら『ワンタン作る！』ってなるくらいに（笑）」。

共演者に食べてもらおうとお弁当を作ったり、リハーサルの日は全員に

おにぎりや卵焼きなど簡単に食べられるものを用意したりと、とにかくマメ！

「時間がとれないっていう人は、時間の配分を工夫したらいいと思う。『これを仕込んでおけば、あとはラク』とか。私は時間配分を考えるのが好きですね。でもルーズな時間も必要だし、そもそもしも楽しくなきゃ作らないのよ、ごはんも。私は料理が楽しいから、コロナ禍でステイホームしてたときには豚骨ラーメンも作りました。ネットでゲンコツを買って、叩いて。近所から『異臭がします』って言われましたけどね（笑）。いつも友達がおいしいって言ってくれる顔を見たくて作ってたけど、なかなか家に呼べない今は、自分のためで十分。『おいしい！んまーい。』ってね。今ならいつでも冷やし中華ができるように、自慢のタレを作ってます」。

きつぷがよくて豪快、そんなイメージの森さんに、お金の使い方についても聞いてみました。

「預金がこれくらいだというのはきちんと把握しているので、これが入ってくるなら、ここまでは出しているか、とかはしっかり意識しています。使える範囲がわかっているぶん、出す場面では大盤振る舞いです（笑）。皆さんに還元はしますね。還元しないと入ってこないですよ、お金って」。

抱え込まずに助けを求める それはとても大切なこと

森さんには、結婚して5年目に事故に遭い、半身不随になったご主人がいます。介護を続けてもう17年に。

「私は外で大勢の人に会う仕事だし、今はまだコロナが怖くて、施設に入ってもらったままなんです。この間に彼は、肝臓にがんが見つかって手術もしました。本当にね、いろんなことがありますよ。ありますけど、いちいち凹んでいたら何もできないんで。『早期発見でよかったねー。スバツと切れた

よ！』って。幸いその後は転移もなく順調です」。

事故が起こってすぐのころは、手だてもわからず暗闇の中。交通事故で、健康保険が使えるケースではなかったため高額の治療費が日々かさみ、蓄えも底をつきそうになったといいます。

「ぼろぼろ泣きながら、区役所に相談に行きました。本当に何もわからなかったから、弁護士をつけるところから一つひとつ教えてもらって。まずは障害者手帳を取って、給付があるのでその点数の中で介護の人を雇いましょうとか、そういうのを全部やってもらっ

舞台と客席の一体感が、ミュージカルの醍醐味です！



た。家もバリアフリーに替えなきゃいけないかったし、車椅子も外用と家の中は別に必要だし。そういうこともね、福祉課の人に相談しながら、一つずつクリアしていったんです」。

すべて自分が担うべきものと思っていた介護も、人に頼っていいのだと気づいたことで救われたのだそう。

「あのね、プロがいるんですよ。プロに任せればいいんです！ 日本はこれから、もっともつと福祉大国になっていかなきゃいけないと思うんですよ。どこよりも高齢者が多くなる国だと、もうわかってるんだから」。

森さんが強く訴えるのは「助けてください」という言葉の大切さ。

「ほとんどの方が『助けてください』は恥ずかしい言葉だと思っていて、いざというとき言えないんです。私はね、主人の車椅子を押していて、段差で『あ、これは上がらないな』と思ったら、大きな声で『手伝ってください！』って言いますよ。そしたらひよいと上げてくださる方がいる。本当は皆さん、手伝う準備はしてらっしゃるんです。だから『助けてください』は、それを言う側だけじゃなくて、手を貸す側にとっても必要な言葉。素直に言える、やってあげられる、そういう世の中になればいいなあ。みんなが優しい、そういう国にしていけないといけないんじゃないかなあって思うんですよ」。

歌の力と自分の可能性を信じて 挑戦を続けていきたい

歌の持つ力を森さんが実感したのは東日本大震災のとき。公演中だった『レ・ミゼラブル』の千秋楽を終え、出演者たちを連れて被災地を訪ねたのは、6月になってからでした。

「石巻の中学校で『ユー・レイズ・ミー・アップ』っていう歌を歌ったとき、教室全体が嗚咽に包まれたの。たぶん子どもたちは、泣いちゃだめだって、ずっと我慢してたと思うんですよ。そのガチガチに自分を縛っていた何かを、歌でちょっと緩めることができたのかもしれない。支えてあげられたのかも。歌うことしかできない、がれきの一つも片づけられない私たちだったけど、これでよかったんだと思えた瞬間でした。音楽の力を信じられたし、むしろ私たちが元気をもらえた。あの日のことは、きっと一生忘れないと思います」。

涙ぐみながら話してくれた森さん。音楽の力で人を幸せにするために、今、新たな取り組みも。

「ボランティアで、障がいのある人たちに歌を教え始めたんですよ。私は歌が専門だからそれしかできないんですけど、歌での楽しみ方を伝えたり、そ

ういうコミュニケーションを通じて、皆さんに笑顔になっていただけたらと。障がいて、100人いたら100通りじゃなくて、それぞれ3000通りくらいあるから、ちゃんと向き合っていくとなると、自分だけではとてもできない。いろんな人を引っ張ってきて、介護する人たちも巻き込んで、音楽を分かち合う楽しい瞬間をつくれたらいいな。難しいこともあるだろうけど、障がいのある人たちを、まずはちょっとでも楽しませられたらと思っています。この活動は、ライフワークとしてずっとやっていくつもり。賛同して手伝ってくれる、一緒に歌ってくれる、ミュージカルの仲間を探しているところですよ」。

53歳で『天使にラブ・ソングを～シスター・アクト～』のデロリス役と出会い、その役を10年間ブラッシュアップし続けてきた森さん。さまざまな役への挑戦はもちろん、2022年から本格的にジャズ歌手としての活動も始めるなど、歳を重ねるごとに可能性の幅を広げています。

「これから先のこと？ どうなるかわからないけど、やりたいことをやる！ それは『やりたくないことはやらない』っていうのとはちょっと違うんですよ。その『やりたくないこと』のなかに、もしかしたら、とても私に向いているこ

とがあるかもしれない。だから常にいろんなことに挑戦していきたい。やってみたら面白いことって、たくさんあると思うので。

舞台もね、私は『主役じゃないと嫌、端役はやりません』なんて言いませんよ。だってそんなのつまらない。来た役はみんな試してみても、私なりに面白く演じてみせるっていうスタンスです。いくつものチケットから毎日違う自分を取り出して、演出家に『どれにする？』って見せていきたい。自分の可能性は一つじゃないっていうことを、自分自身、常に考えていきたいですね」。



プロフィール

森 公美子
もり・くみこ

1959年宮城県生まれ。1982年『修道女アンジェリカ』でオペラデビューし、翌年『ナイン』でミュージカルデビュー。2014年初演の『天使にラブ・ソングを～シスター・アクト～』の主演では、翌年の第40回菊田一夫演劇賞を受賞。数多くの舞台作品への参加のほか、歌手活動、テレビ出演など多方面で活躍中。